

いわいの大地

令和8年

1月

No.58



千厩地域
農事組合法人大平ファーム 組合長
小野寺 彰さん

持続可能な農業へ——地域とともに歩む大平ファーム

農事組合法人大平ファームは、「次世代に繋ぐ営農地域づくり」を理念に掲げ、設立から3年目を迎えました。室根山麓の狭隘な農地約25haにおいて、水稲14ha、飼料作物6ha、高収益作物30a、その他4haの作付けを行い、地域に根ざした農業経営を展開しています。

長年待ち望んだ基盤整備事業が、昨年からは始まりました。区画整理や排水改善によって作業効率の向上が期待されており、整備後の水田で快適に作業する未来を思い描きながら、日々の農作業に励んでいます。

当法人では、田植え後の初期除草剤散布にドローンを活用しており、40〜50代の若手オペレーターが中心となって運用しています。資格取得から6〜7年が経過し、操縦も熟練の域に達しています。今年も農薬を豆粒剤に変更しましたが、ドローン速度やシャッター開度の調整にも即座に対応

し、散布時間は昨年の半分以下に短縮されました。若手の柔軟な対応力には目を見張るものがあります。また、10年以上前から機械の共同利用を進めてきた当法人では、当時のオペレーターが今も現役で活躍しており、貴重な担い手となっています。しかし、今後を見据えると新たな人材育成は急務です。近年では副業として農業に関わる公務員や企業勤めの若者も増えており、地域の若手を中心とした人材確保が現実的な選択肢となっています。

今後は、平日を担う地元中心の作業班と、会社勤めの土日を中心とした副業作業班を組み合わせることで、無理のない作業体制を構築し、誰もが快適に働ける環境づくりを目指します。それが、地域に人が住み続けられる基盤となるものと信じ、今日の疲れを晩酌で癒しながら、明日も汗を流してまいります。

農業者年金で明るい将来計画!

若いうちは政策支援で掛金が軽減される大きな魅力

大東町大原地区で酪農を営む菅原雅継さんは、経産牛30頭、育成牛20頭を家族4人で管理しています。「頭数より内容にこだわる経営が自分のスタイル」と話し、日々の細やかな観察と技術の積み重ねを大切にしています。関東の大学を卒業後、都内の金属メーカーに勤めていた菅原さんは、「自分の裁量で取り組める仕事を」と2010年にUターン就農。しかし、その直後に東日本大震災が発生。放射能の影響で牧草が使えず、輸入乾草に切り替えたものの、牛が徐々に体調不良を起こしました。「腰が立たない牛が増えていくのをただ見ることはできず、牛



【大東地域】菅原 雅継さん

舎に行くのがつらかった」と振り返ります。それでも、各種の勉強会に積極的に参加し、学んだことをすぐに実践。乳量や乳質の大幅な改善に成功し、工夫が結果に結びつく手応えを得ました。令和6年には、これまでの取り組みが評価され、妻の真美さんと共に農林水産大臣賞を受賞しました。

今後も規模拡大にとらわれず、ゲノム検査などの新しい技術も取り入れながら、生産性の向上を目指す考えです。「酪農はやりがいがありますが、休みが取りづらいのも事実。今はヘルパー制度を活用し、4人の娘たちとの時間も大切にしたい」と語ります。農業者年金には、夫婦で加入。若いうちは政策支援で掛金が軽減されることが大きな魅力。「農家には退職金がない。老後の安心のためにも、若い人はぜひ加入を」と語ってくれました。

農業者年金のお問い合わせは
農業委員会またはお近くのJA窓口へ
電話 43-3606
(一関市農業委員会)

【農業者年金で老後も安心!】

あなたの老後生活の備えは十分ですか? 家族で農業者年金に加入し、豊かな老後生活のために備えましょう。

農業者であれば広く加入でき、加入・脱退も自由!

加入資格は以下の3つです。①年間60日以上農業に従事、②国民年金第1号被保険者、③20~64歳の方



編集後記

令和6年9月の農業委員改選に合わせて、当誌「いわいの大地」も新しい編集委員体制で発行されてから早一年が経ちました。この一年、農業委員会の運営を見直すとともに、農業委員会だよりの編成についても、近隣市町村の優良事例を参考にしながら、より良い紙面作りを目指して知恵を絞ってきました。

先日、宮城県東原市農業委員会を視察し、意見交換をする機会がありました。紙面作りに対する思いや悩みを共有し、農地に足を運んで農家や市民の方々と交流することが、より良い編集に繋がるのではないかと、貴重なアドバイスをいただきました。この研修で得た内容は、普段の農業委員会活動に生かせるものばかりでした。

これからも、農業委員会と農家、市民の皆さんを繋ぐ架け橋として、記事内容やレイアウトを工夫し、より一層読みやすい広報紙を目指していきます。読者の皆さんにおかれましても、編集委員が取材に伺う機会があった際は、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

農業委員 遠藤 真一

「いわいの大地」編集委員
編集委員長 小山 範輝(川崎)
副委員長 遠藤 真一(千厩)
編集委員 阿部 久美子(一関)
及川 治雄(花泉)
及川 務(大東)
小野 耕多(東山)
鈴木 修(室根)
後藤 修(藤沢)



基盤整備に向けて丁張を設置し、区画の確認作業



基盤整備を見据え、一昨年から導入した高収益作物(白菜)の収穫作業

農業祭で農地相談ブースを初出展!

農業委員会は10月25日～26日、第75回いちのせき産業まつり農業祭に初めて出展。委員が交代で、農地相談や農業者年金、全国農業新聞のPR活動を行った。来場者からは、農地の貸借や相続などに関する相談を受け、農業委員が専門的な知識を生かして親身にアドバイスを行いました。



また、「岩手県食の匠」に認定されている加藤敏子農業委員は、冬の保存食として親しまれてきた郷土の味「凍み餅」の試食会を実施。じゅうねんとみたらしを絡めた絶妙な組み合わせが好評でした。母から受け継いだ技を守りながら、現代のニーズに合わせた工夫を重ね、地域の食文化の継承と発信に尽力しています。

農業委員会では、今後も地域の農業や農地に関する相談窓口を開設し、皆さまに寄り添った支援を続けていきます。ぜひお気軽にご相談ください。



栗原市農業委員会への視察研修を実施

一関市農業委員会では、11月25日に栗原市農業委員会を視察しました。

当日は、栗原市農業委員会総会を傍聴し、議事運営の流れやタブレットを活用した議事進行について確認しました。その後の意見交換会では、栗原市で取り組んでいる耕作放棄地解消事業、現地調査の実施方法、女性農業委員の活動状況などについて、同委員会より詳しい説明を受けました。

参加した委員からは、課題解決につながる具体的な取組が多く参考になったとの声が聞かれ、事務局・委員双方にとって業務改善のヒントを得る貴重な機会となりました。

今後も継続して研修や情報交換を行い、業務改善に取り組んでまいります。



農地等の利用の最適化推進に関する意見書を提出

市農業委員会（小澤仁会長）は11月4日に令和7年度農地等の利用の最適化の推進に関する意見書を佐藤市長に提出しました。

これは、市の施策立案や予算編成へ生かすとともに、農業者が安心して農業に取り組んでいける施策の展開について要望したものです。



- 要望内容**
- 1 担い手への農地利用の集積・集約化について
 - 2 遊休農地の発生防止・解消について
 - 3 新規就農・参入の促進について
 - 4 有害鳥獣による農作物被害対策について
 - 5 その他農業支援施策の充実について

市長と農業委員会の意見交換会

11月28日、農業委員、農地利用最適化推進委員が、クマの出没件数の増加や年々深刻化している有害鳥獣被害の対策強化、未相続農地問題などについて意見交換を行いました。

- 主な意見内容**
- 中山間直接支払制度における集落協定組織の減少について
 - 有害鳥獣被害対策の強化と支援策について
 - 若手就農者の増加に向けた施策について
 - 持続可能な地域農業実現に向けた第三者継承の推進について
 - 地域計画の今後の進め方について
 - 基盤整備事業に伴う未相続農地問題について

